

# アモック的無差別殺人

野田 正彰

のだ まさあき / 1944年高知県生まれ。北海道大学医学部精神病理学専攻卒業。関西学院大学教授。精神科医、評論家、ノンフィクション作家。専攻は、比較文化精神医学、文化人類学。医学博士。著書多数。

文明、都市化、さらに情報化が進むと、古い非合理的思考は消滅していくと信じられてきた。だがこれも、「迷信の消滅」という迷信のようだった。

感応精神病(二人での精神病)も無くなっていない。その日本の特殊型としての祈禱性精神病は、家祈禱がほとんどおこなわれなくなったので少なくなった。しかし、都市の孤立した家族のなかで優位な者の被害―誇大妄想が、その者に精神的に依存する他の家族に感応していく現象はしばしば見られる。近隣とすべての交際を断ち、家族で餓死していく事件などは、都市化のなかでの感応精神病ではないかと疑われる。

アモックも増えているように思える。これからも増えていくのではないだろうか。マレー語のAmogは、「決死の戦士Amucoに由来する言葉であり、シユテハン・ツヴァイク(オーストリアの作家)の『アモック』や、サマセット・モーム(イギリスの作家)の『雨』などの短編小説によって知っている方もおられるであろう。

アモックは狭い村落共同体の生活のなかで、何らかの侮辱を受けたと感じた者が、抑うつ状態となって村落の外の茂みに数日間うすくまり、その後、突然、武器をもって村人を無差別に襲うのである。殺

されずに取り抑えられたら、なにか要な気分になつた、なにか起こつたのか分からないことと健忘を訴える。村人は体面を傷つけられたとき、このような狂気の型を選びえることを見聞きしており、彼(彼女)はその知識に基づいて興奮する。それ故に「文化結合精神病」とされてきた。精神医学的の症状診断では、人格解離を伴う急性反応精神病ということになる。

ところが近年の日本やアメリカ、西欧諸国で、アモック的無差別殺人事件がときどき報道される。一九九九年九月、JR下関駅に、三五歳の男がレンタカーで突つ込み、さらに包丁で通行人に切りつけ、三人を殺害し、二人を傷害した。大阪池田市における小学校乱入事件もアモック的だった。犯人はさまざまに精神病であったり、または正常であったりするが、殺人プロセスはアモック現象である。自分は社会から弾かれていると敏感に感じ、どうせつまらない敗者の人生なら終わりにしよう、自分が死ぬのなら、この社会も無くなればよい、と考える。情報化によって、彼が対象とする社会は共同体ではなくなり、不公平な情報社会全体となっている。しかも差別抑圧と絶望と大衆への復習は、情報化によって学習されている。文化人類学者と精神病理学者が共同研究すべき領域だろう。



## 目次

APRIL 2006  
月刊みんぱく

4

01 エッセイ 世界へ世界から  
アモック的無差別殺人  
野田 正彰

02 特集  
育てる  
社会で子育てする仕組み  
野村 原子  
「母性」に近づく父親たち  
木村 原子  
マルチメディア時代の子育て  
目黒 強

モンゴルに見る未来の育児 小長谷 有紀  
イランの「子どもの居場所」 森田 豊子  
東北タイの「孫育て」 木曾 恵子  
教育熱心なコリアン一世 金 美蘭

08 未来へむかへミュージアム  
広場としてのミュージアム  
川口 幸也

11 表紙モノ語り  
バイユートのゆりかご  
池谷 和信

12 みんぱくインフォメーション

14 万国津々浦々  
津波が残した亀裂  
小河 久志

15 時論・新論・理想論  
建築家の悲劇―アラブ世界の都市伝説  
福田 義昭

16 外国人として生きる  
ベトナム語の架け橋として  
庄司 博史

18 みんぱくを離れるにあたって  
民族学から観光文学へ  
石森 秀三

19 地域研究企画交流センターの  
組織再編にあたって  
押川 文子

20 生きもの博物誌  
ヒトとチンパンジーの差は  
数パーセント  
山越 晋

22 フィールドで考える  
グトゥの夜に  
大川 謙作

24 特別展  
「みんぱくキッズワールド」  
次号予告・編集後記